忘れもの

るーずりーふ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
忘れもの

【Ｎコード】
Ｎ０７６３Ｎ

【作者名】
るーずりーふ

【あらすじ】
主人公、冬野綾芽が悩むお話。

第一話

青い空には大きな入道雲、暑い日差しが厳しい季節
今は、夏真っ盛り。
「はー・・・・・・」
私の溜息は、セミの鳴き声にかき消される。
明るい太陽とは裏腹に、私の心はどんよりと暗く、鉛よりも重かった。
こんな日は、いつも思い出す。

あの日々を・・・・・

2年前ーーーー

「あやめー、どうしたのー」
「あ、ごめーん、先行っててー。体育館に上履き取りに行くからー。」
「もー、何でそんなの忘れんのー。ホンット天然だよねー。」
友達の声を背中で聞きながら、私は体育館へと足を進める。
廊下の角を曲がり、年期の入った大きな扉に手を掛ける。
　たてつきの悪い扉をほんの少し動かした時、
「あれ？」
何かきこえる。
これは、
ピアノの音だろうか。
上品で優雅な旋律が、美しい流れとなって耳に届く。
音楽のことなんてほとんど知らない自分でも、相当上手いのはわか

る。
なぜか私はその場から動くことができず、
じっとそのなめらかな調べに聞き入っていた。

どのくらいの時間がたっただろう。
演奏はどんどん壮大になっていき、
広い体育館にこれでもかというくらいによく響いた。
そして、とうとう曲も終わりに近づいてきた頃、
一瞬にして、唐突に演奏が止まった。
たっぷりと余韻を残しながら、行き場を失った音が消えていく。
私は、何とも言えない苛立ちを覚え、
扉を開け、前にのり出そうとする体を必死で止めた。
『なんでやめちゃったんだろう。もっと聴きたかったのに。』
私が扉に手を掛けたまま前のめり、という不安定な体勢のままじっとしていると、
体育館の中から「ずずずずず」と椅子を引く音がした。
そのすぐ後、
「誰かそこにいるの？」
よく通るソプラノの声が体育館中に響いた。
扉を隔てたこちら側にも届く。
『あ、もしかして、私がここで盗み聞きしてるのバレちゃった？』
きっとそうだ。
だからさっき、あんな中途半端なところで演奏を止めてしまったのだ。
「ねえ、誰かいるんでしょ？」
またあの声だ。
バレてしまった以上、
いつまでもこんなところに突っ立っているわけにはいかない。
ここに来た本来の理由を思い出したのと、演奏者を確かめたいのとが合わさって、

扉にかけた手を前に押し出すことができた。
ガガガガガ・・・・・・
たてつきの悪い扉を力を込めて開ける。
がらんと広い体育館のステージの上、
ピアノの前でこちらを見つめていたのは・・・・・・
私は驚きに息をのんだ。
「えっと・・・・・」
我が校を代表する不思議ちゃん、桔梗ヶ咲奈々杏寿恵里がそこにいた。

ああ、また思い出してしまった。
一昨年のあの日のことは未だに忘れられない。
夏のこの時期になるといつもあの日に戻ってしまう。
どこかに置いてきた大切なものを取り戻しに。

「そうだ、あそこに行こう。」
思い出の場所、体育館。

第二話

体育館は昔と変わらず、たてつきの悪い扉の先はなにもない広い空間だった。
今にもバスケ部の「ドンドン、キュッキュッ」という試合の音が聞こえてきそうだ。
私はふらふらと中に入っていく。
今日は日曜なので部活動はどこもない。
誰もいない体育館で私は一人、夢遊病者のように彷徨いながら・・・・・
またあの日に戻るのだ。

何だかとっても気まずい。
どうしよう。
盗み聞きをしていたのがバレた以上、
このまま隠れているのもなにか変なので思い切って出てきてしまったが、
さっさと上履きを取って「邪魔しちゃってごめんね。それじゃ、」
といってそのまま出て行ける雰囲気はそこにはなかった。
どうしよう。
ステージの上から私を見下ろしている桔梗ヶ咲奈々杏寿恵里ちゃんは直立不動でだまっている。
ただその目だけは何かを訴えているようだった。
ただ時間だけが流れた。
何か言わなくては、と私はくっつきそうになっていた口を開く。
「あの・・・・いつもここでピアノを弾いてるの？」

するとソプラノの声が帰ってきた。
「たまに・・・・バスケ部の人たちがいないときだけ」
また沈黙の時間が流れる。
「ピアノ上手だね。ならってるの？」
「昔ちょっとだけ」
そして一瞬の静寂が訪れ、
少女が口を開いた。
「聴きたい？」
それは私へ向けられた質問であり、
彼女なりの意思表示でもあった。

鍵盤はなめらかに動き、音を生み出す。
私はただ、それに聞き入っていた。
この曲はさっき聴いていたものだろうか。
静かな草原を思わせるような曲だ。
「あたしね、自分がピアノ弾いてるとこ、この学校で誰にもみせたことないんだ。」
ピアノの音にソプラノの声が混ざる。
「でもあなたには聴いてもらいたいって思ったの。」
手元も楽譜も見ないで彼女は続ける。
「ここで秘密の練習してるのがバレたの、あなたが初めてだし。それに・・・・・」
ピアノがどんどんゆっくりに、音が小さくなっていく。
しばらくして、つかの間の無音の時間が訪れた。
「なんだか昔の自分を見ているみたいで。」
ピアノの音が戻ってくる。
さっきまでの静かさはなく、
それぞれの音があっというまに通り過ぎていく。
鍵盤の上の長い指が、ものすごいスピードで踊る。
「あなたの名前は？」

少女が訪ねる。
やはり手元は見ていない。
「冬野綾芽」
「冬の菖蒲(あやめ)か、なかなかいいわね。」
また曲の調子が変わった。
今度はダイナミックで壮大だ。
「あたしの名前は・・・・・・」
どんどん力強くなっていく。
そして
「ききょうがさき　ななあんじゅえり。」
最後の一音が響いた。

私は、ぱちぱちと手がちぎれるくらいに拍手した。
「あなたとは仲良くなれそうね。だって、
桔梗(ききょう)と菖蒲(あやめ)だから。」
そう言い残して、隠れた天才ピアノ奏者は体育館をあとにした。
「あ、そうだ。あさってもここで弾くからよかったら聴きに来てよ。
あやめ、あたしのことはナナでいいよ。」
ソプラノの声が遠ざかる。

これが私とナナの出会いだった。

はっ、と思いだして私は体育館を飛び出した。
炎天下のコンクリート道をひたすら進む。
自分でも驚くほどのスピードで足が勝手に動いた。
もう、暑さなんかまったく気にならなかった。

「あそこなら、何か見つけられるかもしれない。」
そんな思いが渦巻いていた。

第三話

それから私はたまにナナの弾くピアノを放課後、聴きに行くようになっていた。

ナナは今まで出会った中で一番の変わり者で、
私のことを一番理解してくれる人でもあった。
そんな彼女は頭脳明晰、スポーツ万能、もちろん成績優秀なスーパー美少女だった。
非の打ち所がない、とはこのことだ。
まあ、こんな女子を男子が放っておくはずがなく、
ナナの告白秘話は数知れず、
そのすべてを「ごめんなさい」で断ってきたというのだから
もったいないの一言に尽きる。

更にこんなことがあった。
誰かが落とした消しゴムが転がって転がってナナの足下で止まった。
落とし主はナナに拾ってくれるよう頼んだが、
彼女は「自分で落としたんだから自分で拾いなさい。」
と言い、黙々とノートを書き続けていたそうだ。
こんな話が他クラスの私の耳にまで入ってきたとき、
私は彼女の性格に呆れつつ同時に憧れてもいたのだ。
でも、私はそんな思いを自分の中から追い出した。

「あやめってさあ、二組の桔梗ヶ咲さんと仲いいの？」
私は驚いた。
まさか周りに知られているとは思わなかったからだ。

なんとなく近づきにくいから・・・・・・
一緒にいると自分がダメなやつに思えてくるから・・・・・・
心の中でバカにしてるんでしょ・・・・・・
ナナはいろいろな理由でみんなから敬遠されていた。
私はそんなナナと一緒にいることで
自分までみんなと離れてしまうのが怖かった。
だから廊下ですれちがってもなにか話をするわけでもないし
一緒に遊んだりもしなかった。
それなのに・・・・・
「なんで？」
私は訊いた。
「だって桔梗ヶ咲さんがこの前
あやめの下駄箱に手紙入れてるとこみたから・・・・」
しまった。
ナナはいつも放課後のピアノ演奏会が開かれる朝に
私の下駄箱に手紙を入れてくれるのだ。
でもまさかそれを見られるとは思わなかった。
ナナが学校に来るのは、
部活の朝練中でほとんど誰も登校してこない時間だったからだ。
まずい、なにか言わなくては。
「ああ、あれはね、この前私が忘れ物拾ってあげたときのお礼の手紙。
資料室にノートが置いてあったから届けたの。
朝、下駄箱見たら桔梗ヶ咲さんの手紙が入っててホンットびっくり。
レアもんだよー、１０００円で売ってあげよっか。」
「いいって、いいって。だいじにとっときなよ。」
いつものように笑いながら手を振るクラスメイトを見て、
ほっと胸をなで下ろす私だった。
とりあえずなんとかなったようだ。

それからは下駄箱に手紙を入れてもらうのをやめた。
ピアノ演奏会もあまり聴きに行かなくなった。

公園に着いた頃には、暑さもほんの少し和らいできていた。
木かげのベンチに腰かける。
涼やかな風が通りぬけていく。
その風に乗って
私の心もどこかへ飛んでいってしまいそうだった。

なんてつまらないことにいちいちこだわっていたんだろう。
今なら思う。
ただ、遅すぎる。
どうしてこんなにも気付くのに時間がかかったのだろう。
あまりにも遅すぎた・・・・・

第四話

ある日のできごと。
これは忘れることのない思い出。
今でも鮮明に覚えている。
とても暑い日だった。

私は学校からの帰り道を一人とぼとぼと歩いていた。
　あまりの暑さに夏バテ寸前で、
ふらふらしながら危なっかしく歩を進めていると
背中にズシンと衝撃がかかった。
「なに幽霊みたいな歩き方してんのよ。そのうち半透明になってくるよ。」
なぜか私の背中をバンバンとたたき続けているナナがそこにいた。
私はゆっくりと振り返る。
「あついよ～バテる～」
ナナは私の夏バテオーラなんかさらりとかわした。
「そんなこと言ってるから暑くなるの。
ダラッとしたところに暑さは集まってくるものなのよ。」
今時こんな中学生、天然記念物ものだ。
ああ、だから不思議ちゃんなのか。
「そんなことより、ちょっと付き合って欲しいんだけど。」

公園のベンチはちょうど大きな木の陰になっていて涼しかった。
「付き合って欲しいところって、ここ？」
「うん。あのね、見てもらいたいものがあるの。」
ナナはバックから黄色い水玉模様のかわいらしい紙を取り出した。
私は、はっと息をのんだ。

涼しい風が通りすぎる。

時間はさかのぼり、今日の朝のこと。
「ねえねえ、あやめー。ちょっとこれ書いてー。」
私は友達から一枚の紙を受け取った。
それに目を通して私は絶句した。
そこには、ありとあらゆるののしり言葉の羅列が
違う筆跡で延々と書き連ねてあったのだ。
「どうしたの、これ。」
ちょっと混乱しながら尋ねる。
「となりのクラスから回ってきた。あやめも書けば。ストレス解消
になるよ。」
「どーゆーこと？」
「さいきんさー、桔梗ヶ咲さんのことどう思う？」
「えーっと、べつに何とも思ってないけど・・・・・」
「ちょっと冷たいところとかない？」
「んー、まぁそれはあるかもね。」
「ふーん、じゃ、書いていいよ。ここにイライラをぶちこむだけ。」
友達がじっとわたしのシャーペンを見つめている。
私は紙の余白部分に「ウザい」と書き込んでしまった。
「それだけでいいの？まあいっか。早く誰かに回してきなよ。」
私は後ろで本を読んでる子に手紙を回した。
この手紙の意味がわからなかったわけじゃない。
最後に誰の手に渡るかまで感づいていた。
だけど、書かないわけにはいかなかった。
大勢を敵に回したくはなかった。
なんのことはない、誰かが流行らせようとしている
新しいタイプのチェーンメールかなんかだと思うことにした。
だから書いてしまったのだ、あの紙に。
黄色い水玉模様のあの紙に。

「どうしたの？」
紙を見てからずっとフリーズしたままの私を心配したナナに
顔をのぞき込まれる。
その大きな目にまっすぐ見つめられると
いろんなことが勝手にこぼれ出てきてしまいそうで
私はとっさに目をそらした。
「なんでもないよ」
目線を手紙に移す。
そこにはびっしりと埋まったたくさんの罵り言葉が書いてあった。
そして、真ん中あたりの「ウザい」を見つけた。
その時
私の時間が止まった。
「ねえあやめ、これ、どう思う？」
「ヒドイ、ダレガコンナコトシタノ？」
それは私。
「わかんない。あやめ知らないよね。」
「シラナイ、ワタシワ　ナンニモシラナイ」
知らなかった、ただの遊びだと思ってたのに。
「あたし、どうすればいいんだろ。」
「シラナイ、ワタシワ　ナンニモシラナイ」
「あやめ？」
「タダノアソビダト　オモッテタノニ・・・・タダノアソビ・・・・・
」
「どうしたの・・・・」
「ソウ、コレハ　ダレカガ　カンガエタ　タダノアソビ・・・・」
「あやめ！」
私の左の頬に衝撃が走った。
「ナナ・・・・」
止まっていた時間が動き出す。

第五話

「ごめんね、あやめの様子がへんだったから・・・・
そんなつもりはなかったのに、何かしなくちゃと思って、つい・・・・
・
ほんとにごめんね。」
ナナがしきりにあやまってくる。
私の左頬はまだヒリヒリしているけれど痛くはなかった。
むしろ、私を異空間から呼び戻してくれたナナに感謝しているくらいだ。
ナナがいなかったら私はきっとおかしくなってた。
「ゆるさない。」
・・・・・・・え？
「絶対ゆるさないから。」
そんなひどいことを言うのは誰？
「友達だと思ってたのに。なんてことすんの。」
・・・・・動いた口は確かに自分のものだった。
ナナが必死で涙をこらえている。
私は走り出した。
「待って・・・・」
後ろでナナの声がしたけれど、もう耳が拒絶していた。
砂場を突っ切って、ブランコの間をくぐる。
公園を出る時、追いかけてくる足音が近づいてきた。
もっとスピードを上げる。
足音はまだついてくる。
私は走った。
もう何も考えられない。

車の急ブレーキの音をきいたのは、
大通りを渡った直後のことだった。

もう足音は追いかけてこない。
私の足が止まる。
そしてそのまま全身化石になった。
後ろで起きた恐ろしい現実を、自分の目で確かめる勇気なんて
そのときの私にあるわけなかった。
だから、逃げた。
その場からも。
現実からも。
いくつもの道を通って。
いくつもの角を曲がって。
そうやって遠く離れていくうちに全部なかったことになるような気
がして・・・・・
最低だ。
なかったことになんかならない。
起こってしまった現実なんだから。
心のどこかでそう思っていたから、私の足は絡まり、何度も何度も
転んだ。
転んで、ぶつかって、つまずいて。
でも、もうどうしたらいいのかわからなかったんだ・・・・・。

翌日、私は重い足をムチでたたく思いで学校へ行った。
そして知った。
ナナが交通事故で一生右腕を使えない状態なってしまったことを。
あの紙は、なんでもできるナナをうとましく思った誰かが
軽い気持ちで下駄箱に入れた物であることを。

それからナナが学校に来ることはなかった。

ナナのきれいな指は、もう鍵盤を踊らない・・・・・
力強いフォルテシモも、繊細なピアニシモも消える・・・・・・
それになにより次、笑顔で会うことができない・・・・・
目の前が真っ暗になったみたいだ。
なのに、みんなはいつもと変わらない。
ナナがいなくても、クラスが違うと係や委員会で困らないから。
「いなくなってスッキリした。」なんて言う子までいる。
なんで、なんで、なんで。
私はこんなにも悩んで、悲しんで、苦しんでいるのに。
どうしてみんな、そんな平気な顔していられるの？

時間は、そんな不安や苦しみをどんどん薄くしていく。
だけどそのかわり、私の心にはぽっかりと大きな穴があいた。
大切なものをどこかに置き忘れたみたいな、
何とも言えない重い気持ちがいつも私の中にあった。
そして思い出すのだ。
ナナとの思い出のシーンを。
いつもくっきりと、細かいところまで鮮明に。
でも、見つからない。
何度探しても、忘れものは見つからないのだ。
そうやって過去へ戻っていくうちに
夏は終わってしまうのに・・・・・

第六話（前書き）

最終話です。

第六話

自分がおかした過ちは決して許されることではない。
でも、そればかりいつまでも引きずっていては、
新しい一歩を踏み出せない。
なにも解決できないのだ。

私は立ち上がった。
このままじゃいけない。
前に進まなくては。
二年目にしての決断が何から始まったものなのか、
それははっきりしていないけれど、
とにかく今を変えようと私は立ち上がった。
きっかけなんてどうでもよかったんだ。
大事なのはしっかりと向き合える心。
今まで、できなかった自分が信じられないくらい、
今の私は強い。

ベンチを離れ、公園を出る。
その足取りはしっかりとしていて、
幽霊でも、夢遊病者でもなかった。
向かうところはただひとつ。
そこにすべての答えが待っている。
　確かな思いは自信となって、私の足を動かす。
いつの間にか私は走り出していた。
現実から逃げるのではなく、正面から向き合って戦おう。
今ならあの大通りも渡ることができる。
それは時間が薄めた苦しみでも、我慢した強がりでもない。

大切なものを取り戻したいという強い決意だ。
和風の大豪邸の前で私の足は止まった。
軽く息を整え、緊張をまぎらわす。
「よし」
気合を入れ、ドアチャイムのボタンを押した。
「はーい」
ぱたぱたという足音。
私の期待と緊張がどんどんふくらんでいく。
それがピークに達したとき・・・・・・

彼女は、二年前のままだった。
しかし、右手だけがダランと垂れたまま動かない。
ドアから顔を出したナナを見て、私は思わず泣きそうになってしまった。
「あの、ね。このままじゃいけないなって。
なんてゆーか、ほら、あれ・・・・・」
二年ぶりの再会にあまりに感動してしまい、
自分でも何を言っているのか、いないのか、わからなかった。
ナナは最初、とても驚いていたけれど、
こくりとひとつうなずいて、私の腕を左手でつかんだ。
今度は私が驚く番だった。
その力がものすごく強かったから。
そうだった、ナナは強いんだ。
なにがあっても負けない強い人だったんだ。
私の腕は、ナナにぐいぐいと引っ張られる。
私はバランスをくずしながら家の中に入った。
靴を脱ぎ散らかし、廊下を進む。
ナナは何も言わずに、私をどんどん引っ張る。

しばらくして、私の腕は解放された。
そこは、不思議な部屋だった。
床の間にふすまに畳と、和室三代要素がそろっているにも関わらず、
真ん中で堂々としているのは、一台の立派なグランドピアノ。
ナナはそれに歩み寄り、椅子に腰掛けた。
そして・・・・・
きこえてきたのは、昔と変わらない天才的なピアノだった。
生み出される音は重なって美しく響く。
高速で動く指先は鍵盤の上を踊る様だった。
繊細なピアニシモと力強いフォルテシモ。
片手をたくさん動かして、夢中でピアノを弾いているナナを見て、
私の目から涙がこぼれる。

「見つけた。」

探していたのはこれだった。
忘れていたのはこれだった。
涙は後から後から、私の頬を伝って流れ落ちる。
それさえ、ピアノの音と絡まって、ひとつの曲になっていく。

気づけば、ナナも泣いていた。
涙の二重奏だね。
私はにっこりと笑いかける。
久しぶりの、上辺だけじゃない本物の笑顔だった。
ナナは泣きながら笑って言った。
「おかえり、あやめ」
そして、また二人で笑った。

やっぱりナナは天才で、不思議ちゃんで、
私の大事な親友だ。

第六話（後書き）

読んでくださってありがとうございました。
初投稿でした。
実はこれ、小学生の時に書いたやつなんです。
今読み返すと、なに書いてたんだろ・・・ってかんじです。
だめですね、昔のもの読み返すのは。
この先少しでも文章がマシになればいいんですけどね。
とゆーわけで、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0763n/

忘れもの

2010年10月10日20時26分発行